



チンパンジーのキンの雑巾がけ：関

# わいるどらいふ

## Wildlife

### No.52

2021年8月30日

NPO法人 宮崎野生動物研究会

Miyazaki Wildlife Research Group

## アカウミガメ卵の移植に関する 2021年度宮崎県説明会

はじめに

「わいるどらいふ」No.49（2020年7月15日発行）に「アカウミガメ卵の移植・稚ガメ放流会に関する提言」を載せた。その後、宮崎県教育委員会文化財課の尽力により、2021年4月22日県庁にて宮崎県内ウミガメ調査団体・行政関係者を集めた「ウミガメ連絡協議会」が開催された。過去にもこのような連絡協議会が持たれたことがあったが、近年になっては久しぶりの開催であった。この説明会の目的は、ウミガメ卵移植を伴う保護活動の各種問題点を、県内の関係者により広く理解してもらうためであった。

会では加塩文化財課長の挨拶の後、県文化財課担当者の徳田氏により、「アカウミガメに関する調査結果と留意点について」と題し、文化財行政サイドからみた県内の上陸動向、及び保護活動や行政事業において注意して欲しい点等の説明があった。その後、岩本が「アカウミガメの上陸・産卵生態及び保護活動に関わる最近の動向について」説明を行った。

本記事では、岩本の説明を要約して述べたい。その結論は「まだ県内及び国内のあちこちで実施されている卵塊の移植を主体とした保護活動は、最近の各種研究結果により、必ずしも放流した砂浜に回帰するカメを増やす方向にはつながらないことが分かって来た」というものである。

### 1. 移植によるふ化率の低下

まず移植を行うと、自然ふ化卵巣より単純にふ化率が10~20%下がってしまう。図1に宮崎市、新富町で移植された卵巣と、自然ふ化の卵巣とのふ化率の分布を示した(2017~2019年度)。左の箱ひげ図では、両者の分布の中央値(箱内の横直線)と、半分の測定

点が入る箱の位置がほぼ20%ずれていることが見て取れる。右側の測定点の分布を示した図で、どのようにずれているかをより詳しく見るができる。自然ふ化のほとんどは上部に点が固まっているのに対し、移植卵では点のかたまりが50-60%くらいのところにある。

ここでは図は示さないが、2010年の全国ウミガメ協議会大会で亀崎・谷口氏が全国各地で2007~2009の3年間に調べたふ化率の結果を報告しているが、その結果でも全般的に10-20%近くのふ化率の低下を示している。

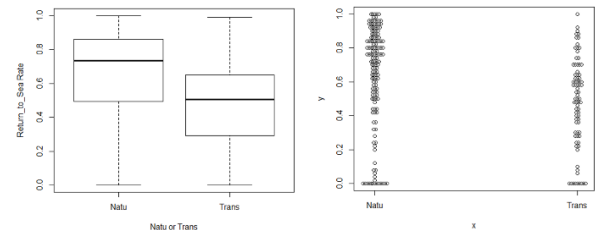


図1 自然ふ化と移植卵巣のふ化率比較。左が箱ひげ図、右が実際の測定データの分布。Natuが自然ふ化、Transが移植卵巣を示す。宮崎野生動物研究会提供のデータ。

なぜこのような低下が生じるのであろうか。最も大きな原因は卵の雑な扱いと、移植時期の不適切さであると思われる。よくテレビなどで放映されている移植保護活動では、掘り上げた卵を単にバケツにごろごろと入れ、移植穴の中にそのままざっと移す作業が紹介される。産卵後1日も経ってこのような移植作業をすると、卵内にやっと固定されつつある胚が振動で動かされ、発生が遅滞・死亡などが起こりやすいと考えられる。

### 2. 産卵後の卵移動時期とふ化率との関係

この点については、2000年以前から多くの研究が蓄積されてきているが、研究により方法・結果に多少差がある。ただ共通の結論は、転卵(移植)作業は基

本的には、3週間程度は行わない方がよい、というものである。Abellaら(2007)は、転卵(移植)によるアカウミガメの胚の死亡は12時間後くらいで最も低いと述べている。Limpusら(1979)はアカウミガメ卵の移植で、相対的ふ化率(産卵直後に移植した卵のふ化数に対する、その後の実験移植卵のふ化数)が半日後では70%に、1日後では10%程度までに下がったと報告している。またParmeterら(1980)もアオウミガメでは転卵(移植)によりふ化率が下がる状態が2~3週間目ごろまで続くと述べている。3研究ともに、2~3週間以降は転卵(移植)等の物理的衝撃の影響が少なくなることが示されている。

ただ、このような実験の手法について十分注意が必要である。ほとんどの研究では、卵の転卵(移植)作業は極めて丁寧に行われている。そっと転卵するか、そっと場所を移動させるか、卵にショックを与えずにゆっくり動かすか等、十分に配慮された実験手法がとられている(それでも卵の移動には、卵の物理的ショックについては潜在的なリスクが伴うという結論である)。

最近なぜ産卵直後からの転卵(移植)で胚の死亡率が上がるかの解明も進みつつある。下記の磁場獲得実験をすすめているNPO法人エバーラスティング・ネイチャー(ELNA)菅沼氏は、産卵直後からしばらくの間は卵白の粘性が上がるため、産卵後からの時間経過に伴い、転卵等で胚に回転がかかると元の位置に戻りにくくなる(産卵後1時間も経って回転がかけられると元の位置に戻れない)と考えている。また回転による、卵の下半球への胚の固定(移動)は、後の胚の死亡と関係が強いそうである。

以上を考えると、よほどの産卵直後でない限り、転卵(移植)はしない方がよいということになる。またその場合でも、非常に丁寧な移植作業が必須である。

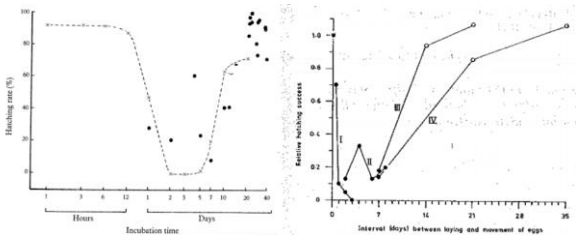


図2 卵を動かした(転卵等)時期とふ化率との関係。左はParmeter(1980)のアオウミガメについて、右はLimpusら(1979)のアカウミガメでの結果。左図の横軸は時間と日数で、右図の横軸は日数で示されている。産卵後1日~1週間の間は移動は最低のふ化率を示す、ということが共通している。

### 3. フレンジー期の問題

Pereiraら(2012)の研究結果を図3に示す。こ

の研究ではふ化後の稚ガメの代謝速度を時間の経過を追って測定した。3種類の稚ガメ(ヒラタウミガメ、アオウミガメ、アカウミガメ)毎にその変化を示している。種類により代謝量の変化パターンは多少異なるが、概してふ化後3時間を過ぎると急速に、どの稚ガメも代謝速度が落ちていくことが分かる。最初の活発な状態をフレンジー期とよぶ。そしてどのカメも12時間後には非常に低い代謝量に落ち着いている。最初のフレンジー期は、当然穴から這い出した後、海に到達し、さらに沖合に到達するために必要な活動期である。

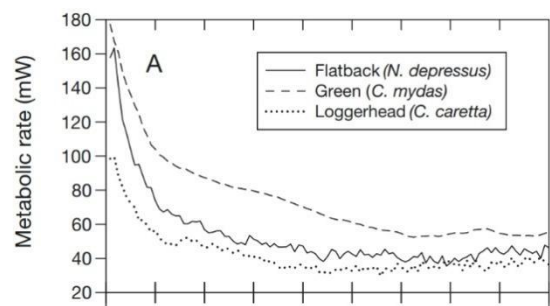


図3 Pereiraら(2012)によるふ化後の代謝速度変化図。Flatbackはヒラタウミガメ、Greenはアオウミガメ、Loggerheadはアカウミガメの測定結果。横軸の1目盛りは2時間区切り。一番左の目盛りが0、一番右は18時間目。

この研究結果から明確に言えることは、稚ガメを人為的放流まで長時間確保しておくことは絶対に避けなくてはならないということである。ほとんどの場合、ふ化した稚ガメは、気温が低く捕食者の少ない夜間に自分で巣穴から這い出し、フレンジー時(巣穴から這い出した後の2-3時間)の活発さでもって、波打ち際まで急ぎ這っていき、そこから沖合めがけて泳ぎ去るという一連のふ化後の帰海行動を終える必要がある。

なお、Hayesら(1992)によると、ふ化した稚ガメが最初の夜に穴から這い出すのは、正常に発生した卵のうち35%、その後、夜毎に少しずつ這い出し、95%の個体が這い出すのに約1週間かかると報告している。基本的に夜毎に順次砂浜に這い出すのである。その意味では、稚ガメの第一陣が這い出したからと言って、昼間などにすぐ卵巣を掘り上げて他の稚ガメをレスキューする(レスキューしたと満足する)という行為は、厳に慎まなくてはならない。稚ガメは正常に発生した場合、自分の発生状況に応じて都合のよい「夜」に這い出すのである。

宮崎野生動物研究会でもかつて「子ガメを送る会」を何度も企画し、会が始まるまで子ガメを確保していた時期がある。この過去の催しは、ほとんどの稚ガメ

を死亡に追いやっていたことを、今さらながら深く反省している（下述5を参照）。

#### 4. 磁場獲得の問題

この問題については「わいふどらいふ」No.49の記事で述べた。これに関わる実験は2年前からNPO法人ELNAの菅沼氏らが宮崎で実施中であるが、コロナ蔓延のため、昨年度、今年度ともに実験が進んでいない。

ただ、初年度の調査結果から、稚ガメの磁場獲得が発生初期に進むので、この時期は動かしてはいけないという結論になる。その磁場獲得は、卵の中の胚の向きがすべての卵で一定の方向に揃うという過程を通じて行われるらしい（菅沼ら、2019）。稚ガメが帰海後に移動すべき方向性についての情報（どの海域に回遊すべきか）は母ガメからの遺伝情報として伝えられると思われるが、各種ガメが発生途中で磁場認識機能を正常に獲得できて初めて、その母ガメの遺伝情報発現に結びつくことになる（菅沼、私信）。この磁場機能の獲得は産卵後間もなく（30分後くらい）から10日ほどかけて完成すると考えられている。先の転卵（移植）等がふ化後2週間以内のどこで行われても、卵の成長に大きな悪影響がでるという結論とも大体合っている。

もし、この磁場獲得中の敏感な時期に転卵（移植）などすると、たとえ稚ガメが海に帰ることができたとしても稚ガメに磁場が獲得されていないので、その種に必要な回遊ルートの間違って選択したり、また成体になってからふ化した海岸への回帰する行動が乱れたりする可能性が高い。言い換えれば、時期を逃した卵の移植は、その海岸への回帰個体数をどんどん減少させていくことになるということが出来る。

#### 5. 弱った稚ガメは肉食動物の餌食

移植を伴う保護活動は、稚ガメにとってさらに高い死亡率をもたらす可能性のあることが、最近指摘されるようになった。自力で海辺に向かう稚ガメは問題ないが、ふ化後数時間を経て孵化場などに確保されるとフレンジー期をすぎて帰海することになる。すなわち、動きが鈍い状況で波打ち際に帰される。ところが、稚ガメが帰海する時期には、岸に近い海中に多くの捕食者（大型魚類等）が待ち伏せており、稚ガメを盛んに捕食しているという研究報告がある（Whelan & Wyneken, 2007）。当然、弱って動きが鈍くなっている稚ガメはこれら捕食者の餌食になりやすい。たと

え移植場でのふ化後人為的に放流されても、実は安全に回遊できる稚ガメは育っていない可能性が高い。これらの稚ガメは、早かれ遅かれ死亡ないし捕食によって、沖へは泳ぎ去ることはできないと思われる。

#### 6. まとめ

以上、移植を伴う保護活動の問題点、及びそのような問題を指摘している研究結果を挙げてみた。結論的には、どうしても移植が必要な場合は、卵の死亡率や成長過程にもっとも影響の少ない時期に移植等を行い、かつ稚ガメが自力で夜の間海に帰れる環境を整えてやる必要があるということである。単に一般受けするからというだけの理由で、会の参加者や報道等のために稚ガメを確保したり、気温が上がってから放流したりするなどの行為は決して行ってはならないということになる。人間が一般的に考える保護策は、動物にとって必ずしも正しいとは限らないことを常に念頭に置いておくべきである。

さらに最も重要なことは、これらの無理な保護活動をやらざるを得なくなった海岸線の荒廃（縮小）の原因を追究し、公表し、かつ長期に亘った対策を練るべきであるという点である。これについてはまた別の機会に述べたい。

なお、この記事に使った研究結果や図は、4月に行われた説明会でのスライドのものとは必ずしも同じでないことを、最後にお断りしておく。

下記の文献リストは、西田伸氏（宮崎大学教育学部）、松澤慶将氏（日本ウミガメ協議会会長）等からご教示いただいたものである。ここにしてお礼申し上げる。また、ELANの菅沼氏からは実験中の最新情報をご提供いただいたことに感謝申し上げます。コロナが早く収まり、宮崎での実験が再開されることを切に願っている。

#### 文献

- Abella, E., Marco, A. & Lopez-Jurado, L.F., 2007. *The Journal of Wildlife Management*, 71(7): 2290-2296.
- Limpus, C.J., Baker, V. & Miller, J.D., 1979. *Herpetologica*, 35(4): 335-338.
- Parmenter, C.J., 1980. *Aust. Wildl. Res.*, 1980(7): 487-491.
- Pereira, C.M., Booth, D.T. & Limpus, C.J., 2012. *Endangered Species Research*, Vol.17: 43-51.
- 菅沼弘行・近藤理美, 2019. 宮崎県におけるキャンピング調査報告書. PP10.
- Whelan, C.L. & Wyneken, J., 2007. *Copeia* 2007 (5), 745-754.

岩本俊孝（宮崎野生動物研究会）

## アカウミガメ調査への

## ドローン活用について

昨年度から、ウミガメ調査へのドローン活用の有効性について、検証をしています。

野生動物調査分野において、ドローンの様々な活用が試みられている昨今の状況ですが、ウミガメ調査においても、調査の短時間化や体力的負担の軽減、少人数化、熱中症予防、調査内容のデータ保存などの利点があると考えています。現段階では、将来的な導入の可能性について、メリット、デメリットを検証している所です。

日本でドローンを飛ばすには、様々な制約があり、気軽に飛ばせるものではありません。航空法、電波法、重要文化財保護法、小型無人機等飛行禁止法、道路交通法、海岸法、自治体の条例、土地所有者の許可などが関わってきます。実際に宮崎市周辺でのウミガメ調査に関わってくるのは、主に「航空法」と「土地所有者の許可」であり、許可申請が必要な場合は申請を行えば良い状況です。航空法の規制では、第三者がいる場合は30m以上離して飛行する、空港近くで飛ばす場合は既定の高度を守る、目視できる範囲で飛行させる、夜間飛行はしないなどの規定について、ウミガメ調査時には注意しなければいけません。現在のところ、航空法の規定を守っての検証をしていますが、将来的な実用を考えた場合、夜間や目視外での飛行も検討した方が良いと考えており、その場合は電子申請による手続きが可能なようです。

実際に飛行実験をしてみたの考察ですが、心配していた画質の点は、現在の一般向けのドローンであっても特に問題なく、撮影・記録が行えました（写真参照）。問題はモニターの方で、パソコンで見る分には記録データのため、キレイに見えますが、現地でスマートフォンのコントローラー画面で見ると、通信データのため、画質が荒くでることがある、影が無い場所だ

と画面が明るすぎて見えにくい、という問題があり、改善が必要です。

雨や風には若干弱いですが、大雨の日は使えません。傘を差さないで良い程度の小雨であれば、今の所、問題なく飛行はできています。風についても、今回は200g未満の小型ドローンを使用しましたが、地上で風速5m/s(木の葉や枝が絶えず動く程度)までなら、飛ばしている分には大丈夫です。空中停止状態での突風には弱く、何度か飛ばされました。風対策には大型のドローンのほうが有利でしょう。

一番の障害と感じたのは、砂と電池です。ドローンは基本的に防塵設計では無いので、通常手に入る機体は砂に弱いです。ジンバル（カメラ部分）やモーターに砂が絡むと、動きが悪くなります。そのため、離着陸時に砂が入らないように、シート上で飛ばすなどの工夫が重要です。また、電池に関しては、ほとんどのドローンで最大10~20分程度の飛行しかできません。撮影だけであれば、2km先の砂浜まで、5分もあれば到着する速度があるので、問題ありませんが、電池には劣化があるため、2年目の今年の検証は電池残量との闘いとなっています。

色々使い勝手の悪い面はありますが、ウミガメの上陸が少ない地域や、上陸や孵化状況、食害の有無などをザックリ調べることには使えそうな気がしています。今年度は私の調査区でほとんど上陸が無いので、検証に行き詰まっております。天気とカメに祈っている毎日です。



上空から見たウミガメ上陸跡（戻り）

宮内 亜宜

## 宮崎県初記録のウミウサギガイ科(2)

前回、最近宮崎県で見つかった4種類の貝を紹介しました。ウミウサギガイ科は海の宝石とも言われています。今回もウミウサギガイの仲間です。宮崎県初記録の種をいくつか紹介します。

海岸の砂浜には貝殻が带状に打ち上げられています。带状の貝殻に沿って歩いていると、何かがキラッと光ったような気がしました。その部分を探すと見たことのない貝が見つかりました。それが2020年3月に見つけたテイラーキヌツツミです。



図1. テイラーキヌツツミ

このテイラーキヌツツミの横に寄り添っていたのがシュスツツミでした。



図2. シュスツツミ

海岸で小さな貝殻を探すのは、暑かったり時間がかかったりするので、貝殻混じりの砂を袋に入れて持ち帰り、家で明るい照明の下でじっくり探すことが多いです。そのようにして2020年12月に見つけ出したのがナナホシケボリです。



図3. ナナホシケボリ



図4. ハナヤカケボリ

同じように砂の中から2021年4月にはハナヤカケボリを見つけました。ハナヤカケボリは宮崎県ではこの1個体だけしか見つかっていません。

宮崎県では今まで見つかっていなかった貝がどんどん見つかっています。みなさんも探してみると、きっと宮崎県で初めての貝が見つかりますよ。

西 邦雄

## 中島先生を忍んで…

令和3年7月に、中島義人先生がご逝去しました。今研究会の前身である任意団体の宮崎野生動物研究会の創立メンバーであり会長も務められ、永年に渡り指導的立場で活動して参りました。そのご功績を忍び、共に活動して来られた会員から先生の思い出が寄せられて参りました。ここに、紹介して参ります。

## 中島義人先生との出会い

義人先生との初めての出会いは、1971年くらいに行われた大崩山学術調査だったと思う。この時、九州営林局で行われていた大崩山の森林伐採にストップをかけるため、宮崎県の山岳会・自然保護関係の団体が大崩山の貴重な自然の現状調査を合同で行う計画を立てた。この時私はまだ大学院修士1年生くらいだったと思うが、研究室の指導教員である小野勇一先生がカモシカの研究者であったため大崩山のカモシカ調査隊を組織し、私もその調査隊の一員として参加したのである。この時の班分けで、宮崎側から参加していた義人先生と初めて合流した。

最初の印象は、元気な人だな、また楽しい人だなというものであった。その当時、義人先生は多分45歳ごろで最も脂ののった時期であったらと思う。今から考えれば、それから約半世紀にも亘って、宮崎で一緒にいろいろ活動をやろうとは思いませんでした。

私は1975年に宮崎大学に赴任した、多分その年に宮崎野生動物研究会を数名の発起人と共に立ち上げ、中島先生とタッグを組んで、カモシカ、アカウミガメ、シカ、サル、イノシシなどの調査を計画し続けてきた。また、一緒によく焼酎を飲んだ。

私の恩師である小野勇一先生は、周りの人にあだ名をつけるのが上手で、義人先生には「中島百貨店」というあだ名をつけた。何しろ、調査で一緒になると、我々が欲しいと思う新しい機器が手品のようにザックから次から次へと出てくるのである。

私が今さらながらあれは良かったと思うのは、昔はマイコンと言っていたが、日本で最初に民生機器としてパソコンが発表された8ビットマイコン、シャープMZ-80である。多分、義人先生はそれを宮崎県で初めて購入した人だと思う。私も大型計算機のプログラムを組んでいたためBASIC言語をこのパソコンで習得し、宮崎県での各種調査に必要なプログラムをつくり、多少とも各種データ解析に貢献できたと思う。

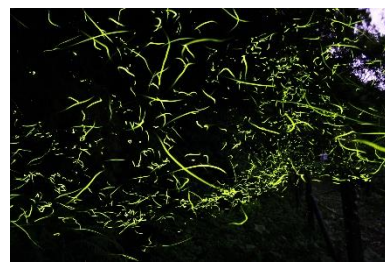
その後、長年にわたり苦楽を共にしてきたが、義人先生のあの進取の気性は、私も今後ぜひ受け次いで行きたいと思う。たぶんそれが、人生の最後の時点まで生き生きと過ごせる極意ではないかと思う。義人先生、天国でも新しいもの・ことへのチャレンジを忘れずにお過ごしください。また、ご教示有難うございました。

岩本俊孝

## 中島義人先生との思い出

中島先生から初めて声をかけて頂いたのは、私が宮崎で高校教師になって10年目くらいの時でした。宮崎でカタツムリの調査をしている奴がいるということで声をかけてくださったらしい。

いろいろな調査に同行させて頂きましたが、今でも続けているのが、小林市出の山のホタル調査です。初めは中島先生、昆虫の永井先生、私の3人で調査することになりました。私が入ったのは小林市出身であること、ホタルのエサのカワニナの調査をさせたかったかららしい。当時の出の山ではホタルが異常発生して、200mしかない水路に、2万頭くらいのホタルが大発生していた時期です。小林市からの依頼で、「ホタル祭りを行いたいのので、次の時期にホタルが何頭飛ぶか予測して欲しい」とのことです。何をすれば予測ができるか、書いてある資料も見つからず、途方に暮れていると、中島先生が「水中にいる幼虫とカワニナを探してみましょ」と言われるので、訳が分からないまま調査をしたのを覚えています。2年目目のことです。中島先生が言われました。「昨年の幼虫数が300頭で、ホタルが4500頭飛びました。今年の幼虫数が280頭ですから、次の時期に飛ぶホタルは計算できますよね」。ハッとしました。このとき、初めて中島先生の意図が分かり、中島先生のすごさが分かりました。3月～4月の雨の夜に、光っている幼虫を探したのも懐かしい思い出です。



ホタルの幼虫調査時の中島先生

西 邦雄

## 中島先生との思い出

私の父が日本野鳥の会の宮崎県支部で一緒にしていたということもあり、子供の頃より「中島先生」という名前はよく耳にしていました。父が中島先生宅から帰ってくると、いろいろな目新しい調査機材を見せてもらったらしく、それをあーだ、こーだと自分に説明していたのをおぼろげながら記憶しています。

私が宮崎に戻ってきて自然環境の仕事に携わるようになってからは、よくご自宅にお邪魔させて頂きました。それが約20年前頃からのので、先生は70才ぐらいでしょうか。その当ても多変量解析などの分析手法の話であったり、新しい調査道具の話であったり、いつも目を輝かせながら素人同然の私にもいろいろな話をしてくれたのを覚えています。

また、ウミガメ調査でも一緒にさせて頂きました。会社員の私は0時を過ぎると次の日のことを考えて「もうそろそろ…」と心の中で思っていたのですが、調査中心の中島先生や同じ班の吉野さんはそれを許しません。帰り間際にカメに出会うと2時まででも3時まででも調査していたのを思い出します。本当にタフでしたね！

先生がこれまで見つめてこられた宮崎の自然を、これからも私達でしっかりと見守っていくので、時折、そちらからもフィールドスコープで覗いてみてくださいね。

岩切康二

## 会員ペンルー

宮崎大学 WILA の中村祐実と申します。今年度の WILA の産卵上陸調査が8月9日に無事終了しました。今年度、特に木崎浜では階段護岸約2段分の砂がなくなり浜の状況が悪いなという印象でした。しかしながら、新入部員を迎えた初めての調査では母カメの産卵シーンに遭遇することができ、ほっとすると同時に新入生にとって良い経験になったのではないかと嬉しかったです。

今年度全体では母カメに遭遇する機会は少なく残念ではありましたが、産卵を実際に見たり、産卵巣で卵を見つけたり等の体験を経てウミガメの面白さに引き込まれ、調査を楽しむ後輩が増えてくれると幸いです。

個人的に一番印象に残っているのは7月中旬に一度の調査で母カメ三頭に出会えたことです。今年は母カメに会う機会が少ないなと残念に思っていた頃でしたので、非常に嬉しかったです。

今年度、WILA の調査にご協力してくださりありがとうございました。来年度もよろしくお願い致します。



松崎で出会った母カメ

次回は博物館の竹下隼人さんにお願いします。

## 動物記録

2021年

- 3/19 宮崎市の大淀川河川敷に白いムクドリを発見。
- 4/9 串間市都井岬で、国天然記念物の岬馬の赤ちゃん、今年第1号の「春駒」が誕生。
- 4/13 高鍋町の高鍋湿原で国内最小のトンボ、ハッチョウトンボを初確認。
- 4/19 新富の海岸でアカウミガメの本年初上陸を確認。
- 4/25 青島にアオウミガメが死亡漂着。
- 4/26 宮崎市・古城小学校 4, 5 年生が卵から育てた希少種オオイタサンショウウオをビオトープに放飼した。
- 5/4 延岡市鯛名町の海岸でクサフグの産卵が始まったと報じられた。5~7 月が産卵のピーク
- 5/6 新富の海岸でアカウミガメの本年度初の産卵を確認。
- 5/9 延岡市北川町の家田湿原で国準絶滅危惧種指定のグンバイトンボが飛び始めた。
- 5/11 宮崎市赤江の飛江田地区でニホンザルの出没。目撃情報が複数。
- 5/21 宮崎県は特定外来種ハイイロゴケグモが高鍋町で見つかったことを発表。
- 5/23 白浜周辺にてアオウミガメ 3 個体の死体を発見。
- 6/1 アオバズクが今年も都城市立梅北小学校に飛来。
- 6/22 幸島のニホンザルの出産シーズンが報じられた。
- 6月 延岡市北方町で白いアオダイショウが発見。
- 7/1 宮崎市内で、イヌマキの葉を食い荒らすキオビエダシャクの確認が相次ぐ。
- 7/13 宮崎市木崎浜でオガワコマッコウの親子が打ち上げられる。
- 7/22 小林市で県の準絶滅危惧種ヒラズゲンセイが確認された。
- 7/25 白浜にアオウミガメが死亡漂着。

## 野生研のあしあと

2021年

- 4/22 宮崎県庁で県指定天然記念物のアカウミガメの保全活動に役立てようと、保護団体や産卵地域の行政職員らの連絡協議会が開かれた。21人が参加し、産卵に関する最新の調査データを学び、それぞれの地域で取り組んでいる保護活動の内容などに理解を深めた。講師を岩本理事長が努めた。
- 4/23 当研究会会員の出口智久氏が令和3年度「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰を受賞
- 4/27 4 月度月例会議をリモートにて開催。
- 5/17 5 月度月例会議をリモートにて開催。
- 5/19 ケーブルテレビにて宮崎野生動物研究会の活動について収録(出口出演)
- 5/20 アカウミガメ一斉調査を開始。
- 6/10 新富南海岸で活動する宮崎野生動物研究会のメンバーが新聞で紹介された。
- 6/13 宮崎県レッドリスト、ハイイロゴケグモの調査始まる。
- 6/20 青島・渚の交番で「うみがめ学習会：日向灘-青島の海で生活するウミガメとイルカたち~宮崎の海からかんがえる世界の環境問題」に西田先生が講師として協力。
- 6/21 6 月度月例会議をリモートにて開催。
- 6/23 広瀬西小学校にてアカウミガメ保全教室を実施。
- 7/7 広瀬小学校にてアカウミガメ保全教室を実施。
- 7/18 西都原にて、ヒメボタルに関する講話を実施。
- 7/20 7 月度月例会議をリモートにて開催。
- 8/2 高鍋町堀之内海岸で活動する宮崎野生動物研究会のメンバーが新聞で紹介された。
- 8/10 アカウミガメの一斉調査終了  
今シーズン中に、以下のアカウミガメ産卵地の海岸清掃が報じられた。  
富田浜にて航空自衛隊新田原基地の隊員有志。  
富田浜にて富田小児童。大堂津海岸にて南郷小児童。  
伊倉浜にて町ボランティア



宮崎野生動物研究会通信「わいるどらいふ」 No.52 2021年8月30日発行

特定非営利活動法人

宮崎野生動物研究会 (Miyazaki Wildlife Research Group)  
代表 岩本 俊孝

<http://www.m-yaseiken.org>

「わいるどらいふ」の無断引用、転載、複製を禁止します。



フレンジーな子ガメ